柏崎市長プレゼンテーション ～原子力安全規制のあり方について～

辛抱強く議論を継続いただき、感謝以外の何ものでもない。地域の会の存在そのものがこの地における原子力安全規制の一つ、行政や議会とも違う、大きな牽制になると思っている。会としての権限の制約はあるが、委員の方々の存在自体が大変大きな安全規制の役割を果たしていると感じており、これからもそういう意味合いもあるということをご理解いただいて、議論を継続していただきたい。

この会ができて何か変わったか、いい方に向かっているかというとまだ早計で、判断はできかねる。例えが悪いが、モグラたたきのように、一つの問題が片づくかと思うと新しいモグラが頭を出してくるということで、戸惑いもあるのではないか。是非、東京電力は変に新しいモグラが出てくることがないよう一層の努力、自らをさらに律する必要があるのではないか。

安全規制ということだが、原子力安全・保安院の位置づけの問題、或いは分離独立についての事柄だと思う。9月に地元からの呼びかけでシンポジウム・意見交換会を行ったが、それっきりであり、なかなか方向転換・前進に繋がらないが、根負けしないようやっていく必要がある。柏崎刈羽だけの問題でなく、幅広く色々な場所、次元、立場から議論を巻き起こす必要がある。

この種の問題は我々の方から分離独立をするとどうなのかなど勉強してぶつけていくことで、問題点が整理され、収れんしていくと思う。皆さん方からも、何か具体的な手法についてのご意見・助言等があれば承りたい。

▼質問・意見

●行政としての対応

Q　この30年間の原発の議論というのはこういうルールだから問題ないとする建前の議論。この1ヶ月間で起きていることは、東電や行政の建前の説明が実態と合わないと認識。市長のモグラたたきという表現は問題を同列にとらえているのではないか。運転再開に向けての改善策をよしとした建前の対応が行政にもあった。それが現場では実際にはそうではなかったというのが今回の異物問題ではないか。我々が聞いているまさかという内部の話が、それを前提にして原発と付き合わなければならない段階になったと認識しており、形を変えて何が起きるかわからないという危機感を持っている。行政としても新しい対応を求められているのではないか。

市長　モグラたたきという表現は、一つの問題を解決していく矢先に、新しい問題が出てくるという意味で、物事の軽重について言ったわけでは